

神戸市演奏協会 第289回公演
2008年度 神戸市室内合奏団 定期演奏会シリーズ



ハイドン・イヤーを前に
～J.S.バッハの息子たちが後の時代に与えた影響～

時代の流れ その変革の時、1780年

2008年10月19日(日) 14:00開演

神戸文化ホール 中ホール



指揮／野平 一郎
Ichiro Nodaira

ピアノ独奏／コーラ・イルゼン
Cora Irsen



Program

C.P.E.バッハ シンフォニア ヘ長調 Wq.183-3
Carl Philipp Emanuel Bach Orchester Sinfonien Wq.183-3

W.A.モーツァルト ピアノ協奏曲 第9番 変ホ長調 「ジュノム」 KV271
Wolfgang Amadeus Mozart Konzert für Klavier und Orchester Nr.9 'Jeunehomme' KV271

W.A.モーツァルト 交響曲 第40番 ト短調 KV550
Wolfgang Amadeus Mozart Symphonie Nr.40 KV550

■入場料【全席自由】

一般／前売 2,700円 (当日 3,000円)

学生(大学生以下)／前売・当日共 1,000円

■入場券発売所

- 神戸文化ホールプレイガイド… 078-351-3349
- 国際楽器……………078-331-1911
- ローソンチケット…………… 0570-00-0407
- 丸太や……………078-331-1031
- Lコード:57114
- ロッコーマン……………078-333-9000
- アルチザン・ハウス…………… 078-332-1579

※学生前売券は神戸文化ホールプレイガイドのみの取り扱いになります。購入時に学生証をご提示下さい。

※就学前のお子様はご遠慮下さい。

※やむを得ず、出演者、プログラムが変更となる場合があります。

会場付近 地図



主催／(財)神戸市演奏協会・神戸市・(財)神戸市民文化振興財団 神戸文化ホール

お問い合わせ／(財)神戸市演奏協会 ☎078(361)7241 <http://www.kobe-ensou.jp/>

とモーツァルトが作曲した作品を前半に、後半にはモーツァルトがその晩年の1788年に作曲した交響曲第40番を聴くことにより、時代の流れと変革の時を耳で確かめることになる。作曲家としてのクリエイティブな視点と、作曲家の心が分かる類稀な演奏家としての立場から、常に深い問題意識をもって作品の核心に切り込む解釈を示す野平一郎さんが、果たして今日のプログラムにどのような新鮮な光を当ててくれるか、ゲスト・ピアニストのコーラ・イルゼンの演奏に対する期待も含めて楽しみな演奏会だ。

C.P.E.バッハ：シンフォニア ヘ長調 Wq.183-3

大バッハの次男として1714年にヴァイマルで生まれたエマヌエルは、実は18世紀後半においては、父親の大バッハをはるかに上回る著名な作曲家と知られた人物である。1738年にベルリンの宮廷にチェンバリストとして雇われ、さらに1767年にはテレマンの後任としてハンブルクの5つの教会のカントールとなった彼は、大バッハから直接薫陶を受けて育ちながら、父親とはまったく異なる新しい音楽世界を展開した。その多彩で劇的な変化をもった奔放な力のみなぎる作品は、ハイドンやモーツァルトなど後につづく作曲家たちにも大きな影響を及ぼした。その代表的な作品は、200曲に及ぶクラヴィーア・ソナタだが、その他にも50曲になんなんとするクラヴィーア協奏曲、19曲の交響曲、その他多くの宗教作品などを生み出した。

今日演奏されるのは、1775年から76年にかけてハンブルクで作曲され、1780年にライブツィヒで出版されたシンフォニアヘ長調。編成は弦楽合奏と通奏低音をベースに、フルート、オーボエ、ファゴット、ホルン各2本が加わる充実したもので、彼の最も優れたシンフォニアの一つである。トゥッティ（全合奏）のユニゾンによる力強い第1主題と、管楽器を中心とした柔和な第2主題による簡潔なソナタ形式の第1楽章、やや重く陰鬱の濃い表情を持つ緩徐楽章の第2楽章（二短調）、トゥッティとソロ群の掛け合いで奏される舞曲調のプレストによる第3楽章（ヘ長調）の3つの楽章が切れ目なく続けて演奏される。

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第9番 変ホ長調「ジュノム」KV271

モーツァルトの協奏曲は、いつどれを聴いても、聴くものの心を実に生き生きとさせてくれる。魅力的な人物が語りかけてくるような親密で表情豊かな旋律や、楽器どうしのいかにも楽しい談笑を思わせる掛け合い、さらには感覚的な美しさと知的な美しさが絶妙にバランスされた構成は、我々の心や知性を刺激する機知にあふれている。モーツァルトは彼が生きた時代精神からして、自分の感情の在り方を音楽で表現したわけではないと考えられるが、だからこそ逆に万人に訴えることのできる、より普遍的な世界を作り上げることができたともいえるだろう。モーツァルトが自ら弾くために作曲したピアノ協奏曲の中でも、とりわけ優れた成果を見せたもので、1777年にザルツブルクで作曲されたこの第9番は、彼がウィーンに移住するまでに作曲したものの中では、最も優れたものの一つといってよいだろう。それぞれの楽章の規模が大きくなっているだけでなく、楽想にも楽章構成法にも日の出の勢いを持った天才的な若者ならではの大胆さが随所にみられ、ピアノに要求される演奏技巧もかなり高度なものとなっている。

冒頭からすぐにソロが主題に関わるという、協奏曲としてはめったにない変則的な始まり方をする第1楽章をはじめ、「ため息の音型」がいたるところに散りばめられ、悲哀感を漂わせた主題が心に沁みる第2楽章、 Rond形式によっているが、中間部に Rond 主題とはおよそ対照的な、典雅な変イ長調のメヌエットが挿入されるという、いかにも独創的なアイデアに満ちた第3楽章の3つの楽章からなる。なお「ジュノム」の名称は、演奏旅行の途次ザルツブルクに立ち寄ったフランスの女流ピアニスト、ジュノムのために作曲されたと伝えられることによる。

モーツァルト：交響曲 第40番 ト短調 KV550

交響曲第40番と言えば、モーツァルトの交響曲の中でもとりわけ有名かつ人気のある作品だ。わずか2曲しかない短調の交響曲。またその調性がなぜかモーツァルトの名曲が集中するト短調。ある人はそれをデモニッシュ（悪魔的）と形容し、またある人はそれをベシミスティック（悲哀的）と形容してきた。この作品には聴く人の気持ちを激し揺り動かさずには措かない、何か不可解な衝動がリアルに現前するように聴こえるからだ。もちろんこのリアリティーは、18世紀後半の時代精神を反映して、モーツァルト自身の個人的感情の表現というわけではなく、むしろもっと普遍的なものなのだが、だからこそそれは、単なる一時的な衝動に終わることなく、聴く者の心に深く刻まれることになる。今回の音楽会のタイトルにあるように、1780年頃とはまさにこのようなあり方が音楽で確立された時であり、1788年に作曲されたこの作品には、そうしたあり方が何よりも完成度の高い形で示されているのである。

この作品は、モーツァルトの早世に先立つこと3年前の1788年に、俗に言う3大交響曲（第39番、第40番、第41番）の1曲として、わずか数ヶ月の間にまとめて作曲されたと考えられている。速筆であったにもかかわらずどの曲も非常に完成度が高く、この第40番も改めてモーツァルトの並々ならぬ天才ぶりを思い知らされる作品だ。「ため息」風の短2度動機を用いた独特の悲劇的パトスあふれる第1主題と、伸びやかながら、やはり短2度動機で満たされた第2主題によってソナタ形式が形成される第1楽章は、全体を通して悲痛な哀切感が漂う。同じくソナタ形式による緩徐楽章の第2楽章も半音階が多用され、変ホ長調を主調とするものの感傷的な雰囲気立ち込めている。シンコペーション・リズムによるフレーズに始まるト短調のメヌエットと、それとは対照的なトリオとの対比が何とも鮮やかな第3楽章を経て、短調圏で激しい転調を繰り返す展開部や短調で徹底される再現部などを持つソナタ形式によって、悲痛感をより高める第4楽章に至るまで、安易な妥協でお茶を濁すことなく、最後の最後に至るまでその世界を貫き通したところに、この作品の他には見られない独自性がある。